



ライラック (ムラサキハシドイ、紫丁香花)



ライラックはムラサキハシドイ *Syringa vulgaris* を中心とするモクセイ科ハシドイ属の花木の総称で、英語では lilac、フランス語では lilas (リラ) として知られる。ムラサキハシドイは原産地のヨーロッパ東南部から16世紀に西ヨーロッパに伝わったと言う。4~5月に紫色の花を咲かせる。18世紀には白いライラックも生まれたらしい*。枝先に花が群れとなるが、個々の花は長さ1cmほどで花筒部先端に花冠が十字に開く。落葉広葉樹で中低木、卵型の葉の先端は少し尖る。属名は材の芯を

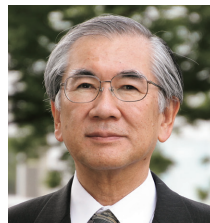
抜いて笛に加工したことに由来することである。ハシドイ *S. reticulata* は日本原産のライラックで、「釧路市の木」である。ハーバード大学のライラックのコレクションの最も古い樹は、1876年に日本からもたらされたハシドイ (Japanese tree lilac) だそうである。

ライラックの花言葉が「友情」「思い出」「大切な友達」であるのは花の香りが青春を憶わせるからだだろう。中部大学では図書館の北側の広い芝地を見下ろす場所に、開学50周年の記念樹としてある。2014年に同窓会から贈られたものである。本来冷涼な気候に育つ植物であるが、温暖な春日井の地でも花を咲かせている。季節には微かに赤紫の花の並びを図書館1階窓際の読書テラスから見ることができる。

トルストイの『復活』には、白いライラックを手にするカチューシャの姿が描かれている。白いライラックの花

学校法人中部大学 総長補佐

太田明徳



言葉は「青春の喜び」「無邪気」であるが、農奴生まれの少女のそれからの辛酸を思わずにはいられない。

北海道大学植物園の奥に各種のライラックの並木道がある。園内の宮部金吾記念館前の紫の花のライラックは、北星学園の創始者サラ・C・スミス氏が1890年に米国の故郷から携えてきたもので、札幌市の最初のライラックらしい。曲折の時を経て、今ではいろいろな種類のライラックが「市の木」として街のあちこちに植えられている。札幌をお訪ねの際にはビールとジンギスカンとクラーク博士だけでなく、この植物園にもどうぞ。カラフト犬タロも待っている。

1. 「花の西洋史事典*」 Alice M. Coats、白幡洋三郎・節子訳、八坂書店2008
2. 「朝日百科 植物の世界」第2巻2-205、朝日新聞出版社1997
3. 「花と樹の大事典」木村陽二郎、柏書房1996
4. ウィキペディア「ライラック」「ハシドイ」
5. The Arnold Arboretum of Harvard University HP
6. 北海道大学植物園 HP